

〈特集〉

序説 戦後 70 年 —— 過去から未来へのメッセージ

梶 本 智 子

Introduction to the Special Issue

MASUMOTO Tomoko

戦後 70 年は今まで以上に節目の年として注目された。「戦後世代」が社会の中心になってから久しいが、戦争を経験した人々の高齢化により、今後さらに戦争体験の話を通じて聞く機会が無くなる時期が遠くないことを感じさせる年でもあった。初めて人類に使用された原子爆弾の証言者である被爆者の平均年齢も 80 歳を超えた。自らの経験を語ることで戦争の恐怖について伝えようとしていた人々の活動も縮小の一途をたどっている。被爆体験を伝え聞く機会が失われることを危惧した広島市では、体験を伝える語り部を継承するために被爆体験伝承者の育成を開始した。実際に経験をした者だからこそその語りには重みがある。話し手も聞き手もお互いが「本人」ではないことを認識した上でその語りをどのように受けとめていくのか、新たな挑戦でもある。終戦からの年数を重ねるごとに、過去のあやまちを繰り返さないため、経験していない戦争をどのように記憶し伝えていくのかが大きな課題となっている。

歴史と記憶に関する研究、特に「戦争の記憶」については第 2 次世界大戦後に急速に発展していった。社会学から歴史学、心理学、文化人類学など、さまざまな分野に学際的に広まっている。記憶に関しては、「個人的記憶」から社会的な集団により供給され維持されるという「集合的記憶」という捉え方がすでに大戦中から紹介されていた (Halbwachs, 1992)。このような流れの中、歴史の捉え方は「唯一の事実的な出来事」から、解釈の多様性を問い、さらに再解釈できるものへと変化してきている。同じ出来

事でもそれを経験した人の立場や関係する国によって違うものになる。出来事と個人や集団の経験にもついた記憶を分けることにより、歴史の新たな捉え方を可能にしている。英語では「歴史」という単語には複数形がないが、「記憶」は複数形でも表記される。起こった出来事とそれをどのように捉えるのかということは立場により大きな違いがあり、そして、関連する人の数だけある。

このように多様性のある記憶は、いかに記憶していくのかも問題になっていく。記憶の表象の方法も多様である。記念碑、博物館、メディア、ポピュラーカルチャーなど、さまざまな手段がある。同じものを見たとしても、そこから得られるものは人によって変わる。まして、「同じ」歴史を捉えたものであっても表象の仕方が異なるものを経験すると、全く違う印象を持つことになる。記念碑や歴史博物館での展示において、何を選びどのようなコンテキストで展示していくのかにより、歴史の事実を違う角度から再構築し、時には新しい記憶を作り出すこともある。そして、記憶のプロセスで何を選ばないのか、つまり、意図的に記憶の継承から消し去っていくということも可能である。どの記憶をいかに継承していくかにより、社会や世代で共有される新たな集団的記憶が形成されていく。日本における戦争の集団的記憶も日中戦争よりも太平洋戦争終盤の方が表象されているものが圧倒的に多い。

原爆に関連する博物館であっても、ロスアラモスで語られている原爆と日本で語られている原爆はまるで違う表象の仕方になる。それは、ロスアラモスにあるブラッドベリー科学博物館の展示と広島にある平和記念資料館の展示に特徴的に現れている。歴史上の事実は1945年8月6日に原子爆弾が人類に対し初めて使用された、ということである。そして、共通しているのはどちらの博物館も原爆を伝えるものであり、両方の博物館には原爆の模型があり、きのこ雲の写真が大きさの違いこそあれ、展示されている。

しかし、その伝えるものは全く違っている。ロスアラモスにある科学博物館が示す原爆の歴史は、ドイツの原爆開発を恐れたアメリカ政府によりマンハッタン計画が立ち上げられ、秘密裏に叡智を結集し、さまざまな困

難を乗り越えて科学的な偉業を成し遂げたことを伝えている。1945年7月16日にトリニティにおいて行われた原爆実験の初成功が物語の最高潮である。広島原爆は8月6日から主体となる展示が始まっている。ロスアラモスでは被爆の被害に触れる事はなく、壮大なマンハッタン計画の遂行過程と科学の偉大な発展に焦点が置かれている。実際の原爆投下はトリニティで行われた実験に比べると、比較的小さな歴史的事実として直後の終戦の事実とともに表記されている。これは平和記念資料館に展示されている原爆投下後にきのこ雲の下で何が起こったのか、一人ひとりの人間がどうなったのかを遺品をもとに物語を伝えているのとは根本的に違う。一方は現在も兵器を含めた科学開発をしているロスアラモス国立研究所に隣接する「科学」博物館であり、広島は「平和」記念資料館である。誰が主催をし、誰に対して、何を伝えようとしているのか、によって同じ原爆であっても全く違う捉え方をして伝えることが可能である。

戦後70年に合わせるかのように、原爆の開発・製造を行ったマンハッタン計画の関連施設が国立歴史公園に認定された。不可能かと思われた原子爆弾の開発を、短期間で国家事業として成し遂げた科学の偉業を歴史に残すためである。この法案が申請された時から、日本のみならずアメリカ国内でも賛否両論があった。一方では、20世紀を代表する科学技術の進歩であるが、結果としては人類を破滅にも導く大量殺戮兵器の製造に結びつくものである。実際に広島と長崎で人類に対し初めて使用された核爆弾が製造されたのも、マンハッタン計画国立歴史記念公園の一部となるロスアラモスである。核兵器製造の場所が子どもたちも来る国立公園としてふさわしい場所なのか、という議論が起こった。日本からは、原爆の開発を称賛するものになるのではないかという危惧があった。

この一件は、1990年代半ばに起こったスミソニアン博物館での原爆展論争を思い起こさせる。きのこ雲の下で何が起こったのかということ伝えるために、スミソニアン博物館で被爆者の遺品を中心にした展示を行う予定が、退役軍人協会をはじめとしたアメリカ世論の反発にあい、結果的には被爆資料のない「エノラ・ゲイ展示」となったものである。当時は戦後50年ということで、第2次世界大戦を振り返る機会でもあった。ボイアー

(1998)によると原爆はアメリカの「良い戦争」という価値観に当てはまらない。アメリカの歴史というパズルには原爆のピースはうまく当てはまらない。即ち、原爆投下の史実は集団的記憶やそれよりも公的な国家の記憶には適切なものではないのである。スミソニアン論争は一部歴史学者の原爆投下を含めた歴史の再検証がされていたことも重なり、戦争の記憶の伝え方の難しさを浮き彫りにした形となった。

継承と忘却の両面を持つ社会的に構築される集団的記憶は過去を振り返るためだけのものではない。集団的記憶により他者との関係が築かれ、個人と社会の関連性も確認されていく。そして、それは個人と社会の未来へも繋がっていくのである。戦争の記憶が遠のく今日、何をどのように伝えていくのか。

今回の特集において戦後70年に関連するさまざまな分野からの論文を掲載することができた。まず、永井浩「戦争報道にみる『反戦・平和』の輝きと陰り」は第二次世界大戦中のメディアのあり方の反省から日本のジャーナリストが戦後どのように戦争を伝えようとしてきたのか、ベトナム戦争を中心に今日に至るまでのメディアの姿勢を検証している。ジャーナリズムにおける長年の経験とめまぐるしく変わる世界情勢におけるメディアのあり方を常に問う著者ならではの論考である。

戦時中の報道規制については他の論文でも触れられているが、土田宏成「第2次世界大戦末期の2つの地震——東南海地震・三河地震と軍需産業——」は、規制のため一般的には知られていない2つの地震について史料を読み解くことで明らかにしている。第二次世界大戦時の防空と日本の自然災害についての研究を専門とする著者がこの「隠された地震」について、歴史学者としての視点から検証をしている。

田中勝「造形芸術の『折り鶴』が果たす平和への役割——コミュニケーション・ツールとしてのアート之力——」では、平和芸術学を専門とし教鞭をとると同時に被爆2世アーティストとしても活躍している著者が造形芸術としての「折り鶴」に焦点を当てている。国内外で平和のための活動を展開する中で、造形芸術が平和を伝える可能性について考察している。

「70 Years Under a Cloud: Information and Social Imaginaries of the

Atomic Bombs」において Gonzalez は、原爆についてどのような語りとイメージがあるのかを歴史的な流れと空間をたどりながら考察している。被爆の経験を語る人々がいる一方でさまざまな理由から語りができない人々、伝えられない物語がある。著者は歴史における「沈黙」に焦点を当て、数多くの被爆者にインタビューを行いスペイン語圏に原爆の実態を伝えてきている。社会で共有される原爆のイメージはメディア、文学、芸術の影響が強い。想像力から作られたものもあるが、それは今後経験したことが無いものにとっては一つの「創造」されたイメージとして記憶にも影響をする。

「“Who could tell us apart? Who would be left to tell us apart?”: Thinking the Unthinkable on the 70th Anniversary」は、歴史学者として“Untold History of the United States”¹⁾をはじめとし、数多くの著書のある Kuznick が原爆投下の歴史的背景の検証と、20年間毎年夏に行っている広島・長崎での平和学習を取り上げている部分から構成されている。平和学習の旅は、留学生を含む日米の大学生が参加をし、その貴重な学びは学生にとっては人生の進路にも影響を与える機会となっている。この論文の重要なテーマは、我々の人生で最も大切なことがらを過去から学ぶべき戦後70年において、未だに語られないことが多く、ゆえに、学ばないままであることをするどく指摘している。

戦後70年の節目に何を学び、どのような記憶を継承していくのか。これらの論文を通して考えていきたい。

注

- 1) Stone, O. & Kuznick, P. (2013). “Untold History of the United States.” Gallery Books, NY: New York.

参考文献

- Halbwachs, M. (1992). *On Collective Memory*. Chicago, IL: The University of Chicago Press.
- ボイアー、P. (1998)「戦争と正義：エノラ・ゲイ展論争から」エンゲルハート&リネンソール(島田三蔵訳)『歴史は誰のものか——人々の記憶、政治、学問としての歴史学』(135-163頁)朝日新聞社